

日本ハリストス正教会教団・西日本主教教区報

西日本正教

No.142

Summer, 2017

西日本主教教区宗務局

604-0965 京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目 283

京都ハリストス正教会内

Email: ocj_kyoto@yahoo.co.jp

電話・FAX (075)231-2453

郵便振替 01030-5-18547



変容祭(顕栄祭)、果物の祝福が行われる。
ブドウの枝で作ったジョージア(グルジア)の十字架は聖ニーナの十字架とよばれる。

春季セミナー

司祭ワシリイ杉村太郎 師

救いとしてのテオシス



三月二十日（祝）大阪教会を会場に西日本主教教区宣教行事「春季セミナー」が開催されました。参加者は講師二名を含めて五十二名。大阪教会からの二十名を中心に名古屋、京都、神戸、東京から、また九名の啓蒙者と、正教に深い関心を寄せる求道者のみなさんが参加しました。

午前の部の講師は、昨年の神学校卒業、司祭叙聖に続いて、京都教会での研修を経て、十一月から九州各地の教会での活動に携わってのにかちワシリイ杉村太郎神父。テーマは「テオシス」（神成）。人が神の恩寵の内に限りなく神との交わりを深めて行く、ハリストスによる人の救いの本質です。杉村神父は、それを特別な霊的神秘体験に与ってゆくということではなく、日々の教会生活の中で痛悔、領聖などの機密に与りつつ、たゆみなく地道に主の教えを生き、ハリストスがその十字架と復活で差し出して下さった愛を、この世に目に見えるものとして示すこと、その結果として「ついにハリストスの満ち満ちた徳の高さにまで至る」（エフェス四章一三）こととして示しました。神学的には非常に難しいテーマなのですが、杉村師は初めて聞く人にもわかるように噛んで含むようにお話しされました。

イーゴリ清水俊行兄

聖人伝を読もう、祈ろう、生きよう

午後の部は神戸市外国語大学講師のイーゴリ清水俊行先生による「エジプトの克肖者マリア」の紹介です。ふしだらな生活を送っていたマリアは、たんなる好奇心でエルサレム巡礼に参加したとき、どうしても聖堂の入口ではね返されて中に入れないという体験をきっかけに、深く徹底した悔い改めの生活を17年間エジプトの砂漠で過ごしまし

た。マリアのこの生涯、そして大斎初週に読まれる「アンドレイのカノン」にある、彼女の悔い改めのとほうもない深さを讃えるいくつもの祈禱文が紹介され、ていねいに解説されました。

午前の部で紹介されたクリスチャンのテオシスの生きた具体例の一つでしょう。聖人たちの生き方は実にさまざまです。幸い私たちには教団出版の「諸聖略伝」があります。一度手にとってごらんください。

（松島記）



西日本主教教区 教区会議

六月一八日



さる六月一八日(日)西日本主教教区「教区会議」が京都正教会、生神女福音大聖堂、教区センターを会場に開催。今回はダニイル府主教座下入院療養中のため、局長が議長代行の祝福を受け、座下の快癒退院を祈りつつ、会議を進行いたしました。

司祭会議・教区理事会(一六日・一七日)

教区会議開催に向け、一六日(金)午後一時半〜司祭会議、一八日(土)午前司祭会議、午後一時会計監査、二時〜理事会。理事会では、過年度と新年度の業務報告・計画(及川)、財務諮問委(松島師)、諸規則委(後藤師)、宣教企画委(伊藤師)、決算報告(教区センター舎)、監査報告・予算案説明・承認(佐藤財務部長)、教区宣教献金の概要・御礼等、これらすべてを原案どおり本会議にかける事が決議されました。

教区会議 新年度教区活動と懇親会

一八日(日)午前主日聖体礼儀、昼食後すぐに本会議。副議長に松島師・佐藤孝雄兄ほか議事役員を選任のあと議事進行。理事会から上程された過年度と新年度の業務報告・計画、教団三委員会報告、財務部長から決算報告(教区センター舎)、監査報告・予算案の説明と承認、教区役員を選任、宣教献金の御礼など。理事会・本会議共に時間が足りなくなるほど議論が白熱しました。

教区行事としては十月に教会代表者懇談会、教区センターを活かした講演会・教区協賛行事、冬

季セミナーなど。出版物、『西日本正教』年二回発行、宣教冊子、宣教献金募集広報は一月。最後に七月全国公会代議員が選任され、四時に会議終了、記念写真。京都婦人会による温かなおもてなしの懇親会。広大な西日本各地から参集した信徒の皆様、ありがとうございました。

(及川記)

十西日本宗務局役員(任期三年)

宗務局長 長司祭 パウエル 及川 信師(京都)
教務部長 司祭 ゲオルギイ 松島雄一師(大阪)
庶務部長 司祭 エフレム 後藤悠太師(神戸)
財務部長 ミハイル 佐藤孝雄兄(京都)





全国公会 開催

七月八日(土)

東京ニコライ会館において、一三時半開会祈禱、ダニイル府主教座下の開会宣言により一七年度全国公会を開始。議長ダニイル座下のご指名により、副議長・書記・議事録署名人・議事運営委員等が選任された。そのあと副議長の司会のもと、ダニイル座下の訓示、教団活動報告、財務諮問委（松島師）、全国宣教企画委（伊藤師）、諸規則検討委など議事が順調に進行した。夕方六時から東京復活大聖堂で晩禱が執り行われた。

かねてより入院療養中であつたダニイル座下の退院、お元気そうなお様子に、代議員一同、真に安堵しました。

七月九日(日)

午前中、ダニイル府主教座下、セラフイム大主教座下、全国の司祭が陪禱する主日聖体礼儀では、小聖入時にダヴィド水口師・ゲオルギイ松島師の長司祭祝福の昇叙式。説教杉村師、領聖後、教役者記憶リテイヤが執行された。

昼食後、公会第二日目の日程案に沿って議事再開、過年度決算報告（小島財務部長）・監査報告、予算案上程が行われ、いずれも全会一致で承認。また聖職者年金制度の成立、本年八月施行が報告された。教団役員・会計監査の選任、人事異動の発表などの議事のあと、セラフイム座下の閉会の

言葉・閉会祈禱、懇親会をもって公会は無事終了した。遠く西日本から出席された皆様、猛暑の中ありがとうございました。
(及川記)

教団人事(八月一日発令 役員名西日本のみ)

宗務総局長・教団責任役員 長司祭イサイヤ酒井
以明師(豊橋)

総局役員・教団責任役員 長司祭パウエル及川
信師(京都)

総局信徒役員 パウエル小田島嘉一郎兄(名古屋)
教団会計監査 ミハイル佐藤孝雄兄(京都)

☆中新田正教会(宮城県加美郡)

管轄解任 長司祭ワシリイ加藤國枝師(仙台)
管轄任命祝福 司祭クリメント児玉慎一師(仙台)

☆九州管区

管轄解任 長司祭パウエル及川信師(京都)
管轄任命祝福 司祭ワシリイ杉村太郎師(人吉)

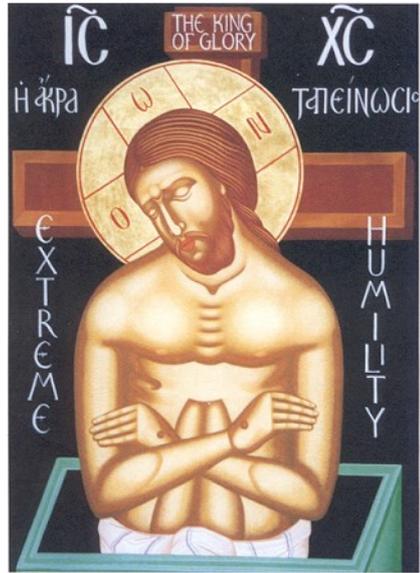
☆長司祭 昇叙 いくとせも！

飾 十字架パリツァ佩用

司祭 ダヴィド水口優明師(盛岡)
司祭 ゲオルギイ松島雄一師(大阪)

テオシス(真の生命)への招き

司祭ワシリイ杉村太郎



正教徒の信仰を支えている聖伝の一つに聖師父の言葉があります。また、その聖師父の言葉を集めた『フィロカリア(抜粋集)』という霊的書物があります。この書物は修道生活の祈りの指南書として修道院や信徒の信心に大きな影響力を持っています。『フィロカリア』には多くの霊的師父達の pneuma・ロゴス(聖神に満たされた言葉)が納められています。本稿ではその詳細に触れることはできませんが、時代を問わず現代に生きる正教徒にとっても普遍的課題である聖師父に共通する主要な論点①「閉鎖的法則の網を突破する視点」②「謙遜」③「祈り」を少しご紹介致します。

まず、「フィロカリア」という言葉はギリシア語で「美への愛」を意味します。人間はなぜ美を愛し求めるのでしょうか。その大きな理由として、神が美や善の創造主であり、私達は創造主に向け

て造られました。それ故、美を求めていくことはその源泉である神を求めていくことに等しい行為となるからです。そしてこの「フィロカリア」の歩みとその目的こそがテオシスと呼ばれる正教徒の歩みのかたちです。テオシスとは修道生活の目的とされておりませんが、広義には一般信徒にも開花し得る恩寵の光なのです。確かに『フィロカリア』の内容は一見一般の読者にはあまり関係ないように思われがちです。厳しい修道生活での霊的・精神的修養に関する修道士に向けた教導の言葉が数多く著されていることも事実です。しかし、『フィロカリア』の言葉は決して特殊な世界だけを対象としたものではありません。即ちそれは、『フィロカリア』の副題に「聖なる覚醒者たちのフィロカリア―本書は聖にして神を担う我々の師父達の著作からの集成である。本書は：正教徒の共通の利益の為に出版された」と記されているように『フィロカリア』のメッセージは聖書と同様に全正教徒、あるいはすべての人間に向けられた宣教的・牧会的なものなのです。繰り返しになりますが、それはテオシスが、ある特定の修行を克服した人間だけに与えられる生命のかたちであるというだけに留まらず、全ての人間が与り得る、姿である事を意味しています。一般信徒であっても真の祈りの生活を通してテオシスに与り得るのです。

テオシスの中心は、真の祈りの内で心身を浄化し、「真・善・美」に向かって誠実な心で前進していくこと、即ちそれが神の真の生命に与っている

ことです。この世を超えて「真・善・美」を求めていくという姿勢はプラトンの思想に似ているとよく言われます。確かに類似する世界観や宗教性もありますが、プラトンの思想とってはこの世界や身体性は「魂の牢獄」として否定されています。しかし正教あるいは聖師父にとってはこの世界や身体性に固執することを回避すべきことは指摘されますが、この世に対して誠実であることは決して否定されません。むしろこの世界は神様の生命(隣人愛)と繋がっているものとして尊いのです。本来この世界は神様に祝福されたものであるという点を見落としてしまっただけではないのです。その点で正教はプラトンを超えています。それ故、この世の務めを果たしていく事は信仰の歩みと何ら矛盾するものではありません(創世記二章一五節)。身体的なものを善から「切り離す」ことは正教の教える生命の本質とは根本的に異なっています。聖書や聖師父が「切り離す」よう促すのは(偶像崇拜)、或いはこの世に対する(情念的固着)です。なぜなら、そうしたものは人を神の生命・愛から遠ざけ、閉じた世界に埋没させてしまうものだからです。

あるいはまた、整理学的に「切り離す」行為に基づいて物事の範疇分析が円滑に進められる、ということはありませんが、あくまでもそれは「役割」において区別されるだけの問題であり、本質的に両者の関係性や有機性が否定されるものではありません。

また人間は、この世の知識を多く蓄えることによつて自分の判断や行動が正しいと傲慢になり、愛の精神から離れ、自己と他者を切り離し、世界にある神の豊かな恵みの現実を見落としてしまいます。理性や感情・感覚の関係性やその評価の在り方もまた然りです。西欧思想では理性に比べると感覚は低く評価されがちです。勿論、聖師父においても理性は「神の像と呼ぶに相応しい高次のもの」と主張されますが、感覚も神様の賜物なのです。また理性であつてもこの世の知のみに固執し得るものであり、先ずはその浄化が求められます。大切なのは、理性も感覚も、善に向けて有効に用いていくことなのです。至聖三者の神様は不可分離存在です。その神様の神の像としての私たち人間も同じく知性・魂・心と身体を分けけてしまふことは望ましくありません。

換言すれば、知性と身体とが協働して善行を表現していく事が大切なのです。祈りにも同じことが言えます。祈りはこの世を超えたものを志向していきますが、同時にこの世に対しても祝福を求めていく行為だからです。

また、『フィロカリア』には「謙遜」に関する言及が多く、「謙遜」とは聖書には「神（しん）の貧しき者」と記されており。この「謙遜・神の貧しさ」はある特定の者に対してではなく、ありとあらゆるものに対して求められている生きた姿勢です。聖書を読む行為、祈禱する姿勢、『フィロカリア』を読むことなどは、どれだけ聖書の言葉また聖師父のことばを知っているか、どれだけ

け長く、多く祈禱しているか、ということではなく、その心をどれほど自らの内に鼓動させているか、ということ。勿論それは他人への評価に

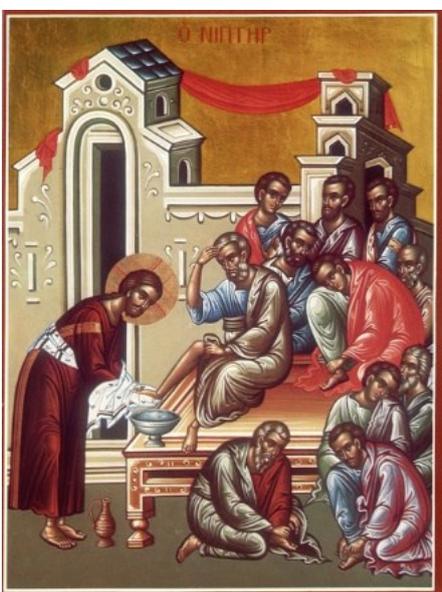


もあり。あの人は謙遜さが足りない、そのように思った時点で謙遜ではないのです。「謙遜・神（しん）の貧しさ」とは「人間」としての自己の不完全さを自覚することに始まるのです。まさにそれはソクラテスの「無知の知」に等しい精神と言えます。それが顕著に示された言葉として、ダマスコの聖ペートルやダマスコの聖イオアンらは諸徳の中で「謙遜―神（しん）の貧しさ」は最もテオシス（神の生命への与り）に親しく尊い、ハリストイアニンの生のかたちであることを述べて

おります。あるいは聖マクシモスも「謙遜はあらゆる罪から人間を解放する」、「全ての善の起源は謙遜である」と主張しています。

謙遜を阻むものとしてこの世の知量が影響しますが、この世の事物がそれ自体として悪と評価されるべきものではなく、その事物知に対しての人間の想念を通して悪魔は誘惑してくるのです。

謙遜や全体的視点を養うために祈りの生活が大切であることを聖師父は主張します。そして祈りも単に祈るのではなく、「謙遜に祈ること」が勧められています。なぜなら、謙遜なる祈りにおいてこそ「愛」が育つからです。〈愛への変容〉こそ祈り、謙遜な者・神（しん）の貧しき者の目標です。



「絶えず祈れ」（テサロニケ五章一七）と記されているように正教徒にとって不可欠な事は祈ることです。祈りはこの世の生活の中で分散してしまった心身の混乱を癒し、愛と謙遜を育てる為の備えの時を与えてくれます。

そして『フィロカリア』の言葉もまた聖書の言葉に響き合い、祈祷書の言葉、イコンの輝き、聖堂の平安空間Ⅱ（聖伝）と呼応し、祈りの世界へと導いていきます。すべての機密がご聖体に与ることへと繋がっているように、フィロカリアの実行はテオシス・変容の道に結ばれます。

しかし、一般社会でこの世の務めを果たしながらどのようにそれが可能となるのでしょうか。ここに一つの疑問が生じます。先述したようにこの世には愛や謙遜の歩みから私たち人間を遠ざける悪魔的な誘惑に充ちております。この誘惑は、悪魔が表面上天使を装って魅力的に感じられてしまう（二コリ一一章一四）為、そこへと囚われがちなのです。

この誘惑的力を正しく識別していくために「知性にも浄化が必要である」と主張されています。

この知性の浄化は「覚醒（ネープシス）」へと繋がります。無論ここで聖師父の主張する「覚醒」とは幻想的エクスタシーの彼方へ精神を高揚させていくという類のことではなく、祈りの中でこの世を通してこの世に働き、そしてまたこの世を超えた神の愛の働き、豊かな生命の世界への招きの言葉に意識を傾けていくことです。祈りの言葉とは呪文などではなく、知恵に満たされた、あるいは知恵へと招く言葉であることがフィロカリアを通して知らされます。

名古屋教会西隣地取得

信徒用駐車場建設に向けて

名古屋正教会神現聖堂は二〇一〇年一月に現在地（昭和区山脇町）に移転、成聖されました。ただ土地の形状が旗竿敷地となっており、出入口が最も狭い所で約二メートルと大変狭く、車両の出入りが困難となっています。さらに聖堂建設から二年後の二〇一二年には更地であった南隣に住宅が建ち、教会が周囲から見えづらくなりました。

ところが今年四月に西隣の家屋が解体され、隣地約一七四坪の土地が更地となりました。名古屋教会としては、土地の一部を購入して、信徒用駐車場を整備することにし、売却先である株式会社玉善と交渉し、教会側幅四メートル、約三十四坪を三七〇〇万円で購入することにしました。

契約は七月十二日に結ばれ、八月十七日には残金を支払い、所有権は名古屋教会に移転しました。ただし登録免許税非課税申請のため、登記は九月となります。工事は九月半ばから始まり、十月末にはほぼ完了する予定です。

購入資金および工事代金としては、名古屋教会聖堂維持基金から一〇〇〇万円を支出、新たに教団から四五〇〇万円の融資を得て確保いたしました。教団からの融資にあたっては、七月七日の宗

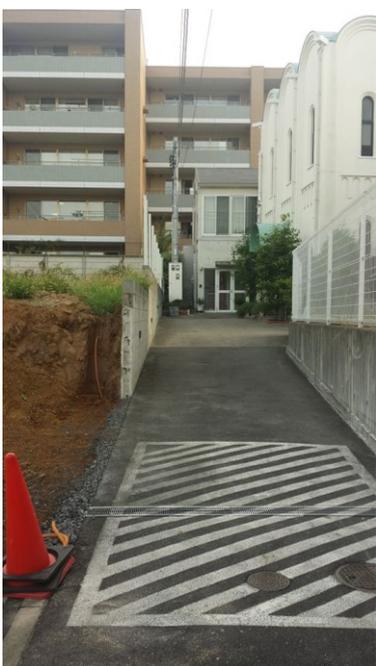
務総局会議にて教団責任役員のみなさまのご承認をいただきました。関係各位のみなさまに改めて御礼申し上げます。

なお返済ですが、聖堂建設時の借入金残一四五〇万円を加えて、五九五〇万円を年二〇〇万円ずつ三十年で返済する予定です。（最終年は一五〇万円）。

返済期間も長期にわたり、高額な借入金をかかえて、これまで以上に支出の削減努力に加え、聖堂維持基金への献金への協力を依頼いたします。名古屋教会信徒一同、全力で取り組む所存ですが、教区のみなさまにもご理解とご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

（伊藤記）

名古屋教会現状
車の通行の利便性確保のため、とりあえずブロック塀の一部を撤去しました。（八月九日）





フィンランドのイコン画家

ペトル佐々木を訪ねて

—— 正教会音楽国際学会に参加して ——

マリア松島純子

「ペトロス・ササキを知っているか」と聞かれたのは6年前、東フィンランド大学（ヨエンスー）で開かれた「ISOCM 正教会音楽国際学会」でのことだった。ペトル佐々木巖（1939-1999）は秋田県曲田教会出身。「フィンランド・イコンの父」として尊敬されている。

あまり知られていないが、ペトルは神学校卒業後、63年から一年間大阪教会の伝教師であった。「普通の人とは違っていた」と代子であるニコライ松田輔祭は語る。「車に当たって無事だったときは『神に感謝』しか言わないし、送別会の話にも『すぐ帰って来るから』と無関心」。信仰のひとすじの人だった。イコンの勉強にアテネに行つてからも「聖書の勉強会を続けなさい」「痛悔、領聖しなさい」「使徒のように生きなさい」と仲間の霊的成長を励まし、「痛悔を受けた」と知らせると「脳裡が熱くなるほど感謝の気持ちでいっぱいになった」と返してきた。

ギリシアでの勉強も順調に進み始めたころ、政変が起こり外国人は国外退去となった。行き場のないペトルに手をさしのべたのはフィンランドの留学生たちで、パウロス大主教のもとでイコン画家として働くことになった。パウロス大主教は共產主義からの避難、戦争の痛手からフィンランド正教会を立て直した人物である。ギリシアで学んだビザンティン・イコンの基礎にパウロス主教の

深い礼拝理解と正教の幅広い知識が加わり、ペトルのイコンは磨かれていった。

さて90年、大阪教会指揮者ティト加藤直四郎師と長女のエカテリナ都也子姉はクオーピオにペトルを訪ね、30年ぶりの再会を果たした。その後ペトルから一冊の聖歌集が送られてきた。聖歌指揮者、作曲者でもあったパウロス大主教の編纂した『エウカリスティア（聖体礼儀）』であった。ペトルはなぜこの楽譜を送ったのだろうか。

フィンランド正教会

フィンランドの正教会は日本とよく似ている。京都や豊橋の教会のような木造の聖堂、金と白に縁取られたイコノスタス、西洋絵画の影響を受けた近代ロシア風のイコン、ペテルブルグの宮廷聖歌をもとにした聖歌、いずれも革命前のロシア教会の特徴を色濃く保っている。ペトルが暮らしたクオーピオの大聖堂も西洋風のイコンが中心で、ペトルのビザンティン・イコンが混じる。

リントウラ女子修道院には、ペトルが若いころ制作したイコノスタスがある。イコノスタスの右端の至聖三者のイコンは有名なルブリョフの「至聖三者」の複製であるが息をのむほど美しい。ペトルとそのイコンを撮り続けてきた写真家ヴェサ・タカラ神父は「ペトルのイコンは形の模写ではない。そこには神が働いている」と語る。聖体

礼儀が始まり、王門が開き、明かりが灯されると、至聖所奥の生神女のイコンは一層輝きを増し、大きく、暖かく、両手に包み込まれるようであった。左手のアナロイ上にはクロンシュタットの聖イオアン・イコンが聖イオアン自身のエピタヒリの上に載っている。聖ニコライの日本伝道を応援した聖人の表情は穏和で力強い。

神が人をその似姿として創られたように、人の作るものにも作り手が映し出される。ペトルは祈りの人だった。彼のイコンの前に立つと不思議な安らかさに満たされる。美術学者のカタリナ・フツソ姉は「彼のイコンはすぐわかります。瞳の描き方、衣の線、日本があります」という。

ペトルの目にはあらゆるものがイコンの素材となった。各地の教会にバスで仕事に行くときにはシートの生地の様相から飾り罫のデザインを考えたり、たそうである。ペトルの三男シメオンは家に残された何千枚ものデッサン、スケッチをまとめて本として出版する計画を立ており、ペトルにかかわるエピソードを探している。日本でペトルについての情報収集を求められた。

ペトルから日本の正教音楽家へのメッセージ

今回の学会発表では、日本の正教合唱聖歌の歴史と、ペトルが加藤直四郎師に送った楽譜『エウカリスティア（聖体礼儀）』を紹介した。同封さ

れたペトルの手紙には、イコンと音楽、表現方法は違っても、ひとつの奉神礼に関わる者としての熱い祈りと日本教会聖歌の発展への深い思いがこぼれている。

「フィンランドの大主教たちは音楽家だった。ロシアからの独立、戦争などで困窮のどん底にありながら、(聖)歌を編曲、作曲、指揮と、唱いながら教会を建て直した。彼等は聖奉事の意味を探究し、伝道されている正教の詞と精神が平民児童にも理解できるように尽くされた。・・・」(聖歌は)人々に対するデモンストレーションではなく、「正教 Orthodoxy」の本来の意味からわかるように、神にまっすぐに向かう(教会の)讚美、教会の伝える正しい讚美を表す。日本でも教会音楽の役割が十分に理解されるように願っている。(90年12月2日)



大阪教会事務室でニコライ松田兄(現輔祭)と(1963)



リントウラ修道院のイコノスタス



ペトルのデザインした十字行用十字架を持つヴェサ神父。



ペトルの三男シメオン。クオーピオの聖ニコライ教会で

フィンランドの聖歌は日本と似ている。『エウカリスティア』にも、聞き覚えのあるメロディが含まれる。パウロス大主教は革新的な聖歌を作ったのではなく、それまで歌い継がれてきたものも大切にしつつ、新しい(ビザンティンなど古い伝統)聖歌も取り入れ、フィンランド語の特性、歌いやすい音域、聖職者と聖歌の対話などに配慮がなされている。フィンランド語は日本語と同様音節数が多い。日本語のわかりやすい聖歌を考える参考になると思う。(ご希望の方には実費で楽譜とCDコピーをします。)

リントウラ女子修道院では修道院長自ら指揮に立って、奉仕者の女性たちをリードして歌っていた。ときに三声、ときに二声、ときに単声。技術は高くないが、祈りに一致した美しさにあふれていた。信経、天主経の他にも、祈りの大切な部分、

連祷、ヘルビム、アナフォラ(「親しみの捧げもの」)などでは参拝者全員の参加が促された。常に王門は開放され、黙誦祝文は聞こえるように読まれていた。学会の開催されたヨエンスーの教会でも同様であった。

この正教聖歌の学会は隔年で開かれる。古代写本、音楽分析など専門的な話も多いが、実際の聖歌隊運営、編曲の工夫、コンピュータ楽譜作成などについての発表もあり、伝統聖歌のワークショップ、コンサート、夕食の集まりも楽しい。参加者も各、国から、研究者のみならず、作曲家、聖歌指揮者、聖歌隊員、聖歌を愛する人などさまざまで、正教の多様性とハリストスを信じる正教の家族を体験するチャンスでもある。次回は2年後の6月、白夜のフィンランド。今から参加を計画してみませんか。

教区ニュース

京都教会

春のコンサート 大盛況

西日本教区センター 教区主催

四月三十日（日）主日午後、京都の西日本教区センターにおいて初めてのコンサートが開催されました。

演奏は聖堂で堂役奉仕をしてくださっているバイオリンニスト、フローリン・クロイトル兄。ピアノ伴奏 陣門華子さん。関西盲導犬協会の協賛です。会のはじめに十五分間、盲導犬協会の宣伝、PR犬ブライト号の歩行演習などのデモンストレーション、会長の挨拶などがありました。一四時四〇分〜コンサート開始、約十曲。すばらしい演奏でした。日本語・英語・ロシア語のチラシ千五百枚、新聞各紙の情報欄、近所の書店・キリスト教会、町内会はじめ周辺を歩いて、チラシ配り。聴衆一四三人、玄関まで人波の溢れる景況。会後の聖堂拝観約七十人。募金約三万円を盲導犬協会に寄贈しました。

（及川記）

広島教会

復活祭聖体礼儀

五月三日（水）は、昨年一月二三日に続き、市内袋町学区会館で聖体礼儀を行いました。あいにく、広島全市をあげての「フラワーフェスティバル」と重なったためか、参拝者は前回より少なかったです。が、大阪、島根からの参加者、さらにロシア人聖歌研究者のナタリアさんもまじえ、主のご聖体血を文字通り囲んで、復活の喜びを分かち合いました。次回は一月二三日に聖体礼儀を行い、前日にYMCAで一般市民にむけた宣教講演会も開催します。



広島での集会は前回から西日本主教教区からの後援を受けています。ご協力にあらためて感謝いたします。

（松島記）

名古屋教会

夏祭り

名古屋教会では八月十一日（山の日）の夕方から「ハリストス教会の夏祭り」と題した夏休み子ども企画を行いました。



教会を会場として、金魚すくい、輪投げ、お面（聖人のもの）、宿題お手伝いコーナーが設けられ、バーベキューと焼きそば、すいか（スイカ割りをしました）を堪能しました。暗くなってきたので花火で締めくくり。

参加者は二十五名、大人も子どもも楽しいひとときを過ごしました。

（伊藤記）

神が一つにしたものを分けてはならない」

五月四日(水・祝)、午後一時から三時まで、京都教会にて西日本主教教区主催の第七回特別連続講演会が開催されました。半田教会の信徒で、師父たちの食卓で」という著作もありますジュゼッペ三木兄が神が一つにしたものを分けてはならない」という題で講演してくださいました。

まずギリシヤ人とユダヤ人の真理についての考え方の違いを説明してくださいました。ギリシヤ人にとって真理とは、自然であり、創造のない輪廻の世界であるのに対し、ユダヤ人にとって真理とは、神様の救いの出来事であり、そこには神様による無からの創造、そして決定的な救いである終末ということが含まれていきます。

教会にとっての真理も、このユダヤ人の真理と同じものである、と三木兄は話されました。なぜなら私たちにとって、真理は啓示という出来事を通して、特にハリストスの受肉、死、復活、再臨という出来事を通して明らかにされるからです。

教会の歴史において、オリゲネスのような観念的な、ギリシヤ人的な真理への探究の道は退けられました。それに対し正教会の聖師父達にとっては、真理は知的というよりも、体験的なものでした。彼らは理論ではなく、聖体礼儀を中心とする教会という共同体の体験を真理の探究の基礎に置いていました。そのため、私たち正教徒にとって真理は、何よりもハリストスの

「交わり」という出来事にある、という言葉を一層説得力をもって聞くことができました。

三木兄は講演の冒頭で、聖書から「従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」(マトフェイ十九章六)という言葉を用いました。ハリストスは直接的には婚配のことを指してこのように言われた訳ですが、三木兄の講演を聞いた後、それを婚配に限らず、私たち自身のあるべき生き方を示すものとして受け取ることができました。(後藤記)



第

第八回 リアナ・トルファシユ
「イコンの顕す信仰」

七月十七日、第八回となる西日本主教教区連続講演会が、西日本主教教区センター(京都教会)にて行われました。講師は名古屋教会信徒のリアナ・トルファシユ先生(南山大学教授)が担当してくださいました。当日は祇園祭の山鉾巡行にあたりましたが、約二十五名の聴講者が訪れました。



トルファシユ姉はまずイコンの基本的な特徴、すなわちイコンの主題、材料、奉神礼における役割、芸術的な特徴について解説を加えました。イコンは(西洋的な意味での)宗教的芸術ではなく、神の国に向けられた扉として、神的生命に与る」というキリスト者の最終目的を示しています。

その上でトルファシユ姉は、ハリストスと生神女マリアのイコンのいくつかの類型について具体的な事例を取り上げて説明しました。ハリストスに関しては、①マンデイリオン(聖なる顔)、②パントクラトル(全能者)、③救世主、④栄光の玉座につくハリストス、の四種類のイコン、生神女マリアに関しては、①ホジギトリア(道を示す者)、②エレウサ(慈悲深い)、③オランテ(祈り)、④玉座につく生神女の四種類のイコンが顕す図像的な意味を明らかにする興味深い講演でした。(伊藤記)

西日本教区教区の行事 ご案内(予定)

—— 西日本教区センター(京都) ——

- ☆9月18日(月・祝) 13~15時 講演会「生神女マリアと私たち」
講師：長司祭ゲオルギイ松島雄一師(大阪)
- ☆11月23日(木・祝) 13~15時 講演会「ロシア社会と正教会」仮題
講師：有宗昌子先生(大阪大学、同志社大学非常勤講師)
- ☆2018年2月7日(水)~10日(土) 10~16時 聖像(イコン)展
- ☆2月12日(月・祝) 13~15時 西日本主教区冬季セミナー
講演会「イコンについて」仮題
講師：サワ鐸木道剛先生(東北学院大)
+いずれも入場無料

—— 広島集会 ——

- ☆11月22日(水) 18時半—19時45分
宣教講演会「知られざるキリスト教 東方正教会」
会場：広島YMCA国際文化センター3号館3-D会議室
講師：ゲオルギイ松島雄一師(大阪)
会費：無料
- ☆11月23日(木・休) 9:30~聖体礼儀
会場 袋町学区会館

新刊のご紹介

★教区出版物 8月14-15日に行われた西日本主教教区主催の『奉神礼基礎講座—誦経聖歌研修』の副読本として発行。希望頒布献金、各1500円

『ひらがな時課経』(西日本主教教区)

漢字カタカナを敬遠する方も多いため、ひらがな漢字の時課経。指示書きはわかりやすい現代語に、翻訳はニコライ大主教が改訳した『大斎第一週奉事式略』などを参考にしてあります。

『ロシア正教会の聖歌』J. V. ガードナー(西日本主教教区)

正教会奉神礼、聖歌の入門書として世界的に読まれている一冊です。用語、祈祷の構造、歴史が解説されています。

★推薦図書

『正教会入門』ティモシー(カリストス)ウエア府主教(新教出版社)

著者のカリストス府主教(1934-)。英国に生まれ、正教に帰正し、多数の著書がありますが、中でも本書は1963年の初版以降、正教会入門書の世界的な定番です。西欧出身の著者だからこそ、現代社会の関心にも応えられる良書です。正教会の歴史、神学、実践までを深くかつ網羅的に解説しており、信徒未信徒を問わずおすすめできる本です。

翻訳は2004年にゲオルギイ松島師を中心として始まりましたが、長い中断を経てようやく出版となりました。本書は2015年の最新版である第三版に基づいています。定価4320円。

